



「無学な、普通の人」ペテロとヨハネの大胆さ、二人を通して行なわれている「著しいしるし」、この波紋がすでにエルサレムの全住民に知れ渡っていること、大衆が出来事のゆえに神を崇めていたこと、その何れをも否定できない窮地に立たされた権威当局は、「人々の手前、ふたりを罰するすべがな（く）」留置した後、むち打って釈放せざるを得なかったのです。ここには、この世の権威、権力で福音の広がりを弾圧しようとしてもできないことと対照的に、聖霊の働きによって神の力が使徒たちの周りに留めようもなく広がっていったこと、病や悪霊からの解放が「神の国」のしるしとして起こったことが語られています。当時イスラエルの宗教的指導者たちはじめ、すべての人たちに尊敬されていた律法学者ガマリエルの発言：「イスラエルの皆さん。この人々をどう扱うか、よく気をつけてください。．．もし、その計画や行動が人から出たものならば、自滅してしまうでしょう。しかし、もし神から出たものならば、．．あなたがたは神に敵対する者になってしまいます」は、神の支配、力、「神の国」の原則を正しく認識した賢い助言だったのです。

イエス・キリストの教えの中心を占めたのは、この「神の国」についてでした。「わたしが神の御霊（聖霊）によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」（マタイ12：28）とイエスは、ご自分の除霊のわざ（「汚れた霊」とも呼ばれた悪霊に苦しめられていた人々の解放）が「神の国」のわざであること、このような超自然的なわざが起こることは「神の国」がこの世に突入したことのしるしであると語られましたが、初代教会以降キリスト信仰が制度化されるに従い、「神の国」＝「死後行くべき天国」という単純な概念が定着してしまい、「神の国」が聖書では、三つの位相で語られていることはほとんど明確にされていません。

共観福音書に八十三回以上も登場する「神の国」（マタイの福音書では「天の御国」）は、注意深く読むと、次の三つの局面から語られていることが分かります。①イエス・キリストの御降誕によってこの世にもたらされた「神の国」：イエスを救い主として受け入れた者たちの直中に、この世と平行して実現している神の支配 ②イエス・キリストが再び地上に戻ってこられるとき（再臨）、完成される「神の国」：千年間（限られた期間）、全地に満ちることになる来るべき神の支配 ③マタイが「父の御国」（13：43）と特記した永遠の「神の国」：“時”の外におられる神が永遠に支配しておられる、初めも終わりもない、この地上の諸事の背後にいつも存在している御国（キリスト教会が「天国」として語っている神と共なる「永遠のいのち」）

初代教会に始まって今日に至るまでキリスト者が生きている「神の国」は①の位相で、サタン（被造物の中で最初に神、キリストに反逆した者）に支配されているこの世と共存状態にあるため、信じる者はこの世に命ある間、神の敵からの攻撃を受け、霊の戦いが続くこととなります。従って真のキリスト者の歩みは、決して楽なものではなく、使徒たちが味わったような迫害、不当な取り扱いをこの世から受けることとなります。しかし、同時に、キリストに従う者には、「神の国」の驚くべきしるし—癒し、奇蹟、預言—が伴うのです。明らかなように、まだこの世ではサタンの支配が続いており、②の位相の「神の国」は実現していません。終末の末期にユダヤ人の王キリストによる千年支配がこの地上に実現することになり、その日をキリスト者たちは「主の再臨」として今日、その到来を待ち望んでいるのです。イエスが弟子たちにたとえを通して語られた「神の国」はほとんどが、この地上にすでにもたらされたが不完全な神の国（位相①）のことであり、また、「来るべき神の国」として語られたのは、もっぱらご自身の再臨によって始まる千年支配（位相②）のことでした。③の位相の「神の国」とは、“時”をも含む限られた次元の中に生きている人間には見えないがいつも存在している“時”の外に存在する神の“永遠の支配”のことなので、すでに存在している御国の実現を祈る必要はなく、が弟子たちが祈り方を尋ねたとき、「御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。．．」と祈りなさいと教えられたイエスの脳裏にあったのは、すでに存在している③の位相の「神の国」が地上に突入すること（①）と地上に満ちること（②）でした。言うまでもなく、キリストの初臨で始められ、再臨で完成する①と②の位相の「神の国」の実現を祈り求めなさいということでした。

興味深いことに、ヘブル語（旧約）聖書のダニエル書にも、イエスが語られたこれら三つの位相の「神の国」がすでに語られています。ダニエル書6：26-27で、生きてこの世の事象に介入されるイスラエルの神を目撃して「この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行い、獅子の力からダニエルを救い出された」とダリヨス王が語ったのは、この世に突入した神の国、①の位相を描いたものでした。不当にも獅子の穴に投げ込まれた聖徒ダニエルが何の傷も被ることなく救い出されたのは、この世の誘惑、迫害にもめげず、神に忠実であったしもべに「神の国」が訪れた結果でした。すなわち、ダニエルの上に、神のご介入、支配が及び、信じる者に現われた神の国のしるしをダリヨス王はじめ異邦人たちが目撃することになったのです。ダニエル書4章には、試練を通してイスラエルの神を受け入れたバビロン王ネブカデネザルの信仰告白が語られています。この世の王国に介入された神の主権、力をほめたたえたもので、やはり、①の位相の「神の国」を体験した者の立場から語られていますが、同時に、「永遠にわたる国」、③の位相の「神の国」も証しされているのです。ダニエル書2章のネブカデネザルの夢と7章のダニエルの夢の最後に登場する「人手によらず切り出され、．．全土に満ち（る）」王国は、人間の築き上げた王国がすべて滅びた後始まるメシヤの支配する時代、すなわち、再臨の主によって地上に完成される②の位相の王国です。

したがって、「主よ、今神の国のしるしをあなたのしもべに顕わしてください」と祈るキリスト者は①から②の位相への過渡期に生きており、「主の再臨」による地上に成る「神の国」の完成を待ち望んでいるのです。